

福澤諭吉 人生の美学 —諭吉と人生の間—



会長 渡辺利夫

福澤諭吉の人生の美学は論説「瘠我慢之説」に最もよく表れています。明治24年の秋、福澤は徳川藩が移封された駿府城あたりがいまどうなっているのかが気になり、ここに出向いたので。途次、初めてアメリカに渡った時に乗った「咸臨丸」が、その後運搬船として幕府によって用いられていたものの、清水港に停泊中に官軍の攻撃にさらされて、7名の船員が殺害されたことを福澤は知っていました。当時、官軍の目をはばかりて死者を葬る者が誰もおらず、死体は朽ちるままに船中に放置されていたらしいのです。これをみかねた駿河の侠客清水の次郎長が手下を使って船から7名を引き出し、手厚く葬ってやったのだそうです。その17回忌に改めて清水港近くの興津の清見寺に「咸臨丸殉難諸氏記念碑」が建立され、福澤はこれを弔うためにこの寺を訪れたという次第です。

福澤は石碑に深々と礼をしてから石碑の背後にまわり、「食人之食者死人之事」と刻み込まれ、これを揮毫した者の名前として「従二位榎本武揚」と鮮やかに彫られているのを目にして驚きます。“徳川家の幕臣として仕えて禄を食んだ者は徳川家の事に死すべきだ”といった意味です。同時に、福澤

の頭をよぎったのは、この年の5月に榎本が外務大臣に任じられ「位人臣を極め」たことであつたにちがひありません。

箱館（函館）での戦いで榎本にしたがひ、官軍への投降を拒否して惨たる戦死を余儀なくされた多くの部下をそのままに、自身は生き恥を晒して拘束され、東京に護送、禁固の刑に処せられたものの生き伸び、明治新政府においては重用を受けている者が、後世に残る石碑にそんなことを刻みつけていはいはざがないという怒りが福澤の心頭に発したのです。福澤は三田に戻り、一挙にしたためたものが「瘠我慢之説」でした。福澤は榎本の出処についてこう記しています。

《古来の習慣にしたがえば、この種の人には俗世から離れ仏所に入り、死者の冥福を祈って供養を行うべきはずの存在である。現在の世間の風潮からして、仏門に入り髪を剃り落すというのも似つかわしくないというのであれば、身を人目につかないところに隠して生活を質素にし、すべてのことに控えめにし人々の耳目に触れないという覚悟をもってこそ本来の意たるべきであろう》
福澤人生の美学、大いなるものあり、です。